

明治30年代の西洋音楽と「教養主義」との結びつき——明治30年代の石倉小三郎による音楽評論から

西澤 忠志 (立命館大学)

本発表は日本の音楽評論家である石倉小三郎(1881-1965)が明治30年代に発表した西洋音楽史に関する評論をもとに、教養主義に基づく西洋音楽鑑賞が重視され始めた過程とその思想的背景を明らかにする。

日本において西洋音楽を芸術と見なした上で鑑賞する動きは、明治30年代から旧制高等学校出身の新興知識人によって行われた。これは「傑作」と見なされた西洋音楽の知識を得た上で鑑賞しその精神を感受する、教養主義に基づいた音楽鑑賞である。これについて岡田(2000)、加藤(2006)は、知識と教養によって他の階層との差異を示すために、学生文化の中で行われたこと音楽鑑賞であると指摘している。しかし先行研究では、それまで芸術とは見なされていなかった西洋音楽が芸術として扱われ、教養主義と結びついた過程とその理由については触れていない。本発表はこれらの点を明らかにするために、西洋音楽が芸術と見なされ始めた明治30年代に西洋音楽史を日本に紹介し、受容することの重要性を論じた石倉小三郎を対象とする。

石倉は音楽評論家・訳詞家として、西洋音楽史と音楽学の紹介、オペラ《オルフォイス》や《流浪の民》などの外国語曲の訳詞に携わった。特に彼の業績の一つとして挙げられているのが、1905(明治38)年に出版した『西洋音楽史』である。『西洋音楽史』は、東京帝国大学教授ケーベル(Raphael von Koeber, 1848-1923)の助言に基づき、ブレンデル(Franz Brendel, 1811-1868)などの音楽史をもとに、ギリシャ音楽からワーグナーまでの西洋音楽史の展開をまとめたものである。そして、この本を出版するまでに得た知識をもとに、石倉は音楽雑誌と文芸雑誌で西洋音楽史の知識を受容する必要性を論じた評論を発表した。

本発表は、『西洋音楽史』を中心とする明治30年代に石倉小三郎が発表した音楽評論の読解と彼が参照した文献との比較を行う。

本発表は、同時代の文明や精神を反映した芸術である西洋音楽の知識を得、その精神的内容を理解することは、過去の作品や音楽の偉大さを想起させるだけでなく、客観的立場から音楽を評価する際の基準となり、音楽界の進歩に貢献することができると石倉が音楽評論を通じて主張したことを示す。加えてその背景として、日露戦争直後の「文明国」としての自意識、西洋音楽の演奏会の増加、ケーベルを通じた「文化」を重視する態度とドイツ中心の音楽観の受容を指摘する。

以上を通じた本発表の意義は、同時代の日本社会や受容された思想との関わりを明ら

かにすることにより、教養主義的な西洋音楽鑑賞が学生文化に留まるものではなく、同時代の社会に対する問題意識の中で生み出された点を指摘することにある。